

---

# 聖戦Dolls

花火！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖戦Dolls

### 【Nコード】

N2135A

### 【作者名】

花火！

### 【あらすじ】

たわいもない日常が突如にして崩れていく。ネガティブだけど自称前向きな主人公が、環境に戸惑いながらも生きていきます。人は認められないものを排除する。自分が認められなくなってしまったら…

## 1 神からのBLACK-MAIL

騒がしい着信音と共にメールが入ってきた。

机におきっぱなしのケータイが、ベートベンの『運命』（トランスMix）とバイブ音でコラボレーションしている。

バイブのせいで机から落ちそうな気がして、僕は読んでいた本を机に伏せた。

無機生命体であるケータイも使い慣れてくると愛着がわくもので、早く出てやらないなんて思う。

発光ダイオードの七色が僕を急かす。

椅子から体を伸ばして、見事到着。

そして同じ苦勞をして、椅子にもどる。

部屋の空気が止まった。CDプレイヤーが、振動で止まったらしい。いいとこ聴いていたのに…

本もそうだ。マクベス、いいところだったのに。

ケータイを持ったまま日に焼けた背表紙をにらむけど、悲劇を読む気分じゃない。…もういいや。

諦めて、はいはいと言った感じで画面を開くと、『受信メール1件』とのこと。

誰だろう、友達かな。

…僕が送らないとメールなんて滅多に來ないのに、珍しい。

乾いた笑いと、そのあとに長い溜息。

まあ… そんな哀しいことはさておき、慣れた動作で僕はメールを開いた。

『Dollの皆様、裁きの時はやって参りました。只今からDollの皆様の処刑を開始いたします。』

異端者には神の子による死を    B L A C K - M A I L E R

…不幸の手紙？

そう。なんともない悪戯メール。

一件消去を選んで、消してしまえばいい。殺されるわけないんだから。

そう思ったけど、なにか引つかる。…妙におかしい。不幸の手紙らしく、ない。

『死ぬ』と書いてあるのはお約束だけど、何人に回せば大丈夫とか回避方法が書かれていない。

「はあ…。無限にメールを回せと…？それとも、僕によっぽど死んでほしいのか…」

僕はケータイを持ったままベランダに出て、風にあたる。やはり、考えすぎなのだろうか。

自分が握り締めているものが、突然に怖くなる。

白白い画面に映る文字が、僕の鼓動を加速させていく。

…何故か自分が、このメールの送り主に殺されるような気がしてならないのだ。

「まさか。まさか…。ね。」

口に出す言葉とは裏腹に、ケータイを握る手は段々と震えてきた。

本当に、何故だろう。別に不幸の手紙とかの悪戯メールは、今回が初めてというわけでもない。

逆に慣れているといったほうがいくらいだ。

でも何故か、このメールだけには反応してしまう。少し涼しい風が耳元を通った。

「風已、ご飯出来たから降りてらっしゃい。」

「お兄ちゃん、早く来ないと、おかず全部食べちゃうよー！」

ふと、意識が現実に戻された。

母さんと妹の声が、一階のリビングから聞こえてくる。

なんか、メールなんてどうでもよくなってきた。おなか減ったし、うん。

僕は意外にさっぱりしたところがあるとおもう。自称だけど。

それに： 大体、Doorとはなんなんだ？

ベランダの戸を閉めて、下のリビングに向かいながらそんな事を考えていると、なんか人事のような気がしてきた。

「母さん、今行くー。おかず残しておいてよー。」

僕の声は、妹まで届いてんのかなあー？

早く行かないと、僕の方まで取られるんだから…

取られたら恨む程の好物はないけど、おかずなしで白米を食べつつけるのはやっぱり哀しい。

階段を足早に降る。フローリングを走るときは、滑らないように注意しながら。

僕は日常を進んでいく。それなりに楽しくて、つまらなくて。それなりに退屈で、窮屈でも。

日常はリフレインするものだから。：メールなんて気にしない。

大体、僕は「ルリガキ カザミ」であって「Door」とは何の関係もないんだ。

たわいもない にちじょうが ぼくは いちばん すき。

## 1（後書き）

主人公・風巳<sup>カザミ</sup>君はいかがだったのでしょうか？  
彼の日常はこんな感じですよ。  
そして、これから崩れていきます。

2 運命はdoorをたたく

今、僕は現実とも、幻ともいえない世界にいる。

突然、視界が赤くなって此処にきたのだ。ふわふわと漂っているような感覚。

真っ暗で何も見えない。上も下も分からない。まるで宇宙空間のようだと僕は思った。

いったことなんてないけれど。

瞼がやけに重く感じた。ふと気づく、かすかな声。

『誰かが、呼んでる…』

声が聞こえた。はつきりとは聞こえない、僕を呼ぶ声。僕は宇宙空間という感想を撤回する。

海の中にいるようだ。これなら経験がある。

たしか少し深いところだと、上からの声は聞こえにくくなるんだっけ。

…溺れて沈みかけた経験が、一度だけある。

段々、呼ぶ声のはつきりと聞こえるようになってきた。

僕の意志は、目覚めようとする。

でもどこか引つかかる心。

闇の中で、僕の本能は起きる事を拒否していた。

このまま意識とともに永久に眠れと、本能は僕に言うんだ。

僕はドアの前にいる。その先には、呼ぶ声。後ろからは、行くなという本能。

…僕はあんまり本能に従うほうじゃない。

食欲もなにもかもそう。まあ… 睡魔は別だけど。

それにほら、呼ばれたなら行かないと。

単純明快な自我。慎重に考えた方がいいこともあるのに。

自嘲の笑いをもらしながら、ドアに手をかける。大きい運命のドア。軽く叩いてから、僕は呼ぶ声の元へ。

重いドアを開けて、白の世界へ一歩。僕は足を踏み入れる。

そして、漂っていた意識はその声に呼ばれるように元に戻った。

「風巳さん！風巳さん！」

目が覚めると、ベッドの横の女の子が僕の手を握っていた。

あ、この子は… 真頼マリアさん（サナヨリ マリア）だった。同じクラスの。

僕は起きぬけの頭を猛スピードでフル回転させた。そうじゃないと、誰か分からないのだ。

人脈が少ない僕が知っている女の子なんて、クラスメイトぐらいだから。

「あ……、風巳さんっ！」

ほっとしたような、泣き出しそうな表情で、彼女は起きぬけの僕を見下ろす。

僕は最初に聞きたいことがあった。

「マリアさん？なんで僕…… 此处にいるんですか？」

今更になってあたりを見回すと、白いもので統一された部屋。そして吸っただけで消毒されそうな空気の、匂い。

僕の腕につながれた透明のチューブ。一滴一滴落ちてくる雫。：

点滴なんていつ以来だろ？

まあ、ここは病室らしい。

あたりを見回す僕に、彼女は俯いて… 小さく呟いた

「風巳さん…。なんでというか、あの、Dollsって知ってますか？変なメールがきませんでしたか？」

あ の 、 不 幸 の 手 紙



はつとした僕は息を飲んだ。…忘れるはずがないじゃないか。  
「きました。不幸の手紙みたいなものが。」

冷静を装って答えると、マリアは俯いたまま語りはじめた。  
かみ合わない視線が、酷く痛い。

「風巳さん…あなたと、あなたの家族は3日前、事件にありました。」

視界が赤くなって

あのメールを、僕は消せずにいた。そのままで、1日を終わらせるはずだった。

寝て覚めれば、またリフレインの生活が始まるはずだったんだ。  
メールがもつと来て、気づかないうちに消えてしまふ。それくらい  
のもののはずだった。

啞然とする僕に、彼女はそれでも話を続けていく。

「そして、あなた以外の全員は…」

どうして僕は、病院にいるんだろう。

こんなのは全然、日常なんかじゃないはずなのに。

そう、家族は？僕の夕飯のおかずを盗むのが得意な妹は？

僕の疑問の目に対して…彼女の唇が微かにに震えているのが分かった。

殺さ

……

僕の脳内を物凄い勢いで、何かが駆け抜けた。

一瞬の予感。

彼女の手を握る僕の手もいつのまにか、震えていたらしい。

そして僕には、彼女が何を言おうとして震えているのかも…  
となく分かる。なん

『…』という沈黙が、僕に時間の猶予を与えていた。

「殺されました……。」

予想通りだった。

後ろへ仰け反るような衝撃が僕を襲う。

本当、ベッドに倒れこもうかと思った。

…家族が殺されたんだ。僕には、肉親がないということになる。  
ヒトリなんだ。

運良く、生き残ってしまったらしい。…運、良かったのかな。

どうして、僕は生きているの

別に僕は、毎日を楽しんで生きてきたわけじゃない。

…生きることには執着してたわけじゃない。

生きている事には疲れていて、死ぬには臆病すぎた。

だから、本当になんたなく… 虚しく淡々と過ごしていただけなんだ。

なんで… あんなに毎日を一生懸命楽しんで生きていた妹は死んで、  
どうでもいい僕が…

生きているの？

開いている方の手は、無意識にシーツをぐしゃぐしゃと掴んでいた。  
僕は自らに答えを出した。

生き残ったから、病院コホにいるんだ…

「風巳さん、犯人は『人形狩り』といいます。」

犯人。憎むべき、犯人。

…でも、分かったって僕にはどうすることもできない。

怒りや復讐心じゃない。虚無巻とやるせなさ。でも大半は、また殺

されるんじゃないかという恐怖。  
生きていたいと心から望むわけじゃないけど、殺されたくはない。  
い。な

人形： Doll

殺される恐怖から、能がフル回転したらしい。  
メールの中の『Doll』が、『人形狩り』に不意に繋がった。  
狩られたんだ。

僕の家族は狩られたんだ。

人形なんて知らない。

でも自分のなかの直感が僕に何かを訴えていた。

「こんなこと、信じられないと思いますけれど…」

病院は、聖域と同じ空気を持っているのかもしれない。

教会の礼拝堂のような、そんな感じ。

ベッドの横から語りかけてくる彼女の言葉が、しんみりと心に来る。  
ほんとうなら、こんな落ち着いていられない。

錯乱状態に陥ってる事だろう。

Dollって… いったい、何なんだ

まだ精神が吹っ飛んでない僕は、すこし物事を考える余裕があるらしい。

Dollとは何だ？

…人形じゃないんだから、僕の家族は関係ないじゃないか。  
殺される事なんて、ありえない。

病室の空気を、肺に思い切り詰め込んでみた。

息が詰まる。

彼女と真正面から目が合った。

マリアの蜂蜜色の髪が、儚く揺れる。

セピア色の瞳が、揺らぐ。

そっと動く、彼女の唇。

コマ送りで進む、時間。

「あなたがDollなんです。風巳さん」

僕………

「僕がDoll？ ……人間じゃ、ないんですか。」

マリアは泣いているみたいだった。

頬を流れるものは何も無い。でも潤んでいた。

そしてなにより、全身が震えていた。

全身で泣いていた。

今、泣けないでいる僕の代わりに。

「そういうことになります、あなたは人間じゃない…。けど、あなたは幸せなDollです。人間としていられたから…。」

……… 幸せだったね、確かに。

今、僕しか生き残っていない。どうして僕は死ななかったんだろう。生きていることについて、これから生きていくにつけて… 僕は、

僕は理由が欲しい。

「マリアさん、Dollについて詳しいことを教えてください。

…家族のぶんまで生きて見せます。」

前に進まなきゃ仕方がない。僕は生き残った。

何か、すべき使命があるんだ。人とはそんなもんだから。

今、僕は物凄く冷静。… なつもり。

『Dollとして生きる』という事を、僕は僕なりに理由にした。

ただ、後を追う勇氣もないなんてことは隠し通して。

「はい、D o l l というのは… E S Pと呼ばれています人々が作った人工物です。」

「人工物…。」

でも怪我をした僕からは赤い血が出る。骨も折れる。溺れば息が苦しくなった。

…人工物？いったい、人間と何が違うんだ。

「そうです。だけど命。7：3。海と陸の割合と同じ、ほとんどは人間と一緒の命。」

陸の部分が、人工物というわけか。僕は他人事のように納得した。同じ人間ですら争うのだから、D o l l が人間に狩られたって不思議はないだろう。

「人工物の部分はデータなんです。このデータはE S Pにしか弄る事ができません。」

僕の30パーセントがデータでできている。想像してみると、不思議な気分になった。

今、動く心臓が人工物。巡る血脈も人工物。…僕の、思考は…。

「最初、D o l l は夢のモノとして作られていました。しかし、最近では裏の世界で使われています…。」

「…。」

押し黙るほかなかった。緊張感が駆け巡る。

まず、僕が戦えるはずがない。利用価値がない。使えないD o l l だ…。

裏の世界？どーすればいいんだよ…。もし僕が使われるならば。

「でもD o l l だって心をもっている者が多い。だから人間とよくぶつかります。」

そりゃそうだ。『奴隷的』な扱いを受けるものは、なんかしら抵抗を示す。

今僕が、使われたくないと思ったのと同じように。

「E S Pも、D o l l が高値で売れるのでぶつかります。まあ、E

SPも人間ですし。でも、Doll側のESPもいるんですよ。」

「？」

Dollが高く売れる。まあコレは理解できる。高性能ロボットだと置き換えればいい。

僕は口元に手を当てて、考えてみた。Doll側にESPがつく。どうしてだろう。

人間とDollは戦う。ESPとDollも戦う。なのに、どうして。

彼女はすうと深く息を吸って、一言付け加えた。

「…たとえば私ですね。」

「マリアがつ！？」

利益を無視して、Dollにつく。ほとんど人間を敵にするようなものじゃないか。

「マリアさんがESP！？」

「そうです。傷ついた人形を助けているんですよ。」

人間を敵にするようなこと。なるほど、彼女ならありえない話でもないかもしれない。

清楚な、名前の通りの女の子だから。

マリアなら、頼っても大丈夫かな。

そんなことを考えていたら、マリアが笑顔で喋り始めた

「風巳さん、よかったら家に来ませんか？私の家、Dollの住処になってるので。」

僕も家族はいなくなっちゃたわけだし…

それよりもなによりも、他のDollに会ってみたい。

色々な話を聞きたい。もっと、もっと沢山の事を知りたい。

そしてマリアのことも。

僕はベッドの上で頭を下げた。

「退院したら、僕も居候させてください！」

「はいっ、お待ちします！」

彼女は深く頷いてくれた。

僕の、Dollとしての新しい生活が始まりそうだ…

僕は決して忘れない。

でも思い返さない。

ただ必死に、前だけを向くために。

## 2（後書き）

目覚めると病院。

そして、僕に残された別れという突然。

起きてはいけないという本能を振り切って、僕は生きていく。



### 3 (前書き)

僕はD o l l。そんなもの知らなかった僕だけれど、けっこう近くにもD o l lはいた。

病院を退院した僕の、また始まった…。でも少し違う日常。

## 03 Class mateは外国産

病院を退院した僕は、マリアの家で新しい生活を始めた。家族を失ったことは寂しいが、話し合える人がいるから、まだ楽な方だと思って暮らしている。

そう、いままでと同じように。

学校は学校で…特に変わったことはない。

はずだったんだけど……

僕が入院している何日かの間に、学校では事件が起こっていた。ナイフを持った男が学校に入り込んだのだ。

死者三名、重症七名、軽傷…とかなりの騒ぎになっていたらしい。マリアさんから聞いた話だと、犯人は逮捕された後に自殺したという。

そして、この事件でスターになったクラスメイトが一人。

僕の斜め後ろに座っているジュリという女の子だ。

「…そりゃ、怖かったけどさ。トモダチが刺されんのを見てるだけってのは、やっぱり無理じゃん！」

教室の後ろだつて、彼女がいれば中心になる。さっきまで沢山の人が集まっていた。

ちなみに…何人が刺した後で血まみれの犯人に、消火器の中身をぶちまけたのは彼女である。

その時に警察は突入したとか何とか…。

極限状態で友達の為にそこまで動くことは、なかなかできることじゃない。

凄い人である。

が、しかし凄い人じゃ無い。

簡単に言うところ、そう、人では無いのだ。

ジュリは僕と同じ、D o l l 。だから、人じゃない。

『きりーつ、れい。』

声にはっとして、とりあえず機械的に挨拶は済ませた。タイミングをずらすと、けっこう恥ずかしいんだ。

…ぼーっとジュリのことを考えていたら、放課後のホームルームが終わっていた。

先生、何喋ってたんだろう？　ってか、先生いつ教室に来たんだっけ？

…チャイムすら、気づかなかったし。

机のひんやりとした感覚に誘われて、眠っていたのかもしれない。時間に置いていかれた感じがした。

まあ、そろそろ帰るか…。椅子から立ち上がるうとしたら

「風已、一緒に帰るか？」

斜め後ろから声をかけられた。ジュリだ。

「帰りましょうかあ…。」

僕は最近、ずっとこの調子。

暑さでもやられてるし、D o l l としての新しい環境にもやられてる…。

たぶんきつと、いや絶対に疲れてるんだ。

ジュリ、本名ジュリエット・クレイバーン。

本人はこの名前が嫌いらしく、皆には『ジュリ』と呼ばせている。

正直言って、女の子と話した事なんてあまりない。隣を歩くだけなのに、なんか妙に緊張した。

「ジュリはいつ、自分がDollだつて気が付いたんですか？」  
隣を、僕よりは速い歩調で歩いていく彼女に、質問。

Dollとして、彼女のほうが先輩である。色々とDollとして聞きたいこともあるし。

「もがが… とつとまつへへ、たへたうからー！」

ボディランゲージで言葉を伝えてくるジュリに「だいたい何言ってるか分かるから平気です。」と、とりあえず伝えて。

ちなみに、訳すと「ちよつとまつてて、食べちゃうからー！」となる。

口の中にクッキーを押し込んでいたジュリは、クッキーが一段落したところで答えてくれた。

甘い匂いが、下校路の風に乗る。

ジュリいわく、今日発売の新製品なんだそうだ。

「気づいたのは、日本に来た時かな？あ、ウチって昔、イギリスに住んでたんだ。つーか、外国産Doll。」

んで、捕まって売られて目が覚めたら、日本にいたって訳。でも、いきなり日本語を話せるっておかしいだろ？

あと、ウチは処刑場から逃げてきたんだ。そこにいたってことは、Dollなんだなあって。」

ジュリの話は、Doll初心者に難しい用語が多すぎのような気がする…。

「あの、『処刑場』ってなんですか？」

「はあお前、それくらい分かれよ！本当に人間の生活してたんだな。処刑場っていうのは、埋込型人形処分場って所。

科学者達が人形で実験したりしてるんだ。そっから逃げんのは、けっこう大変。」

「…そうなんですか。」

ジュリも大変だったのだろう。あえて触れないでおいた『人形』で

『実験』というワード。

…大体のことは、僕でも感ずくことができた。  
一瞬、ジュリの表情に影がさしたから。

病院で少し、マリアが教えてくれていたから。  
ただどジュリは、ヒマワリのようにニカツつと笑っている。  
やっぱり強いDoolerなんだ。

…Doolerとかじゃなくても、普通に強いんだ。  
見惚れるような強さだ、と。

僕は、そう感じた。

きっと、僕はこのようには生きてはいけないだろう。

太陽の花びらが、とても眩しい。

はあ…。

この釈然としない感情は何だろう。

「やっぱり、Doolerって大変なんですね…。僕は裏の世界って知らないけど。」

そう言つて、僕はまた苦笑するんだ。

…本当のところ、知りたくも無い。

自分がまだ足を踏み入れたことも無い、闇の世界のことなんて。

「…風已、生きてく気がある命はなかなか死なないんだよ。っと、家に到着！」

生きてく気かあ。

ジュリがどうやって生きてきたか、生きているか。それを僕は知らない。

でも彼女が言つと、とても説得力があつた。

「あつ、ジュリ待つ…。」

ジュリが家に向かつて走り出すから、僕も駆け出す。

ジュリもマリアの家に居候しているのだ。

どちらが先に家の敷居を跨ぐか…

もうすぐ決着がつきそうだ。

いつも せなかを おいかけてるのは ぼく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2135a/>

---

聖戦Dolls

2010年10月11日18時10分発行